

旧下関市内

第三章

長府藩・清末藩の足跡

15. 歴代藩主菩提寺三か寺



功山寺総門



笑山寺

萩の東光寺・大照院が藩主の菩提寺として有名なように、長府藩の場合も功山寺、笑山寺、覚苑寺の三寺が藩主の菩提寺となっています。しかし、萩が初代秀就以降、三代・五代と、奇数代藩主が東光寺、二代綱広以降、四代・六代と偶数代藩主が大照院というように、はっきりとした基準のようなものがあるのに対し

て、長府藩の場合はそれぞれの事情で三つの寺に分葬されています。

特に功山寺の場合、秀元を葬ったことによって従来長福寺と称していたのを、秀元の法名「智門寺殿功山玄誉大居士」により功山寺と改称したものであり、三代綱元を葬った覚苑寺は、綱元によって創建された寺です。



覚苑寺

さて、三つの寺に葬られた藩主をたどりますと、まず功山寺が、既に述べたとおり初代秀元。以降、五代元矩、九代匡満、十代匡芳、十一代元義、十二代元運、十四代元敏、十五代元雄、そして元匡（本来十六代でしたが、早世のため毛利家では元海を十六代としています）。

次に笑山寺ですが、ここの墓所には二代光広、七代師就。さらに覚苑寺には開基の三代綱元と、六代匡広、十

ただし維新の原動力ともなった国学との関係からか神道へと改宗したため、元雄と元匡は従来の仏教的墓碑ではなく、秀元の墓碑を中心に石柵によって囲まれた墓所のそばに、別仕立てで縦713cm、横546.5cmの基壇の上に円墳を重ねた型の墓となっています。なお功山寺の毛利家墓所には、歴代藩主の他、直系子女、室・側室等を加え、総てで34人の霊が葬られています。

■初代長府藩主・毛利秀元

1600年の関が原の戦いの後、周防・長門の2カ国に封じられた毛利家は、長府と岩国の地を分封しました。

毛利長府藩の当初の石高は3万6千石。後に5万石となっています。初代藩主となった秀元は、串崎城を居城と定め、慶長7年（1602）に入城しました。串崎城（櫛崎城あるいは雄山城とも）は、大内氏の重臣内藤隆春が築城し、入城に際して修築したものです。毛利秀元は、文武に優れ政治力もある実力者でした。面貌才知は秀元の祖父元就を髣髴させると、小早川隆景が評したそうです。

毛利秀元は、毛利元就の四男・穂田元清の子として天正7年（1579）備中猿懸城で生まれました。豊臣秀吉から可愛がられ、偏諱を賜り秀元と名乗りました。下関海峡で座礁・遭難した豊臣秀吉を救出したことはよく知られています。

■分家の分家・清末藩

清末藩は、初代長府藩主毛利秀元の二男元知への藩領分知（清末藩・1万石）は、承応2年（1653）第三代長府藩主綱元が、秀元の遺志を尊重して実現させました。慶応3年（1850）の秀元の死から3年後のことでした。分家（長府藩・別家ともいう。）の分家（清末藩）ができるのは稀なことでした。昭和62年（1987）11月、清末藩創設333年記念に、藩邸跡に「清末藩邸跡」と刻まれた碑が建立されました。

次に笑山寺ですが、ここの墓所には二代光広、七代師就。さらに覚苑寺には開基の三代綱元と、六代匡広、十

三代元周が葬られています。

こうみてきますと四代元朝と八代匡敬が見当たりますが、共に萩宗藩を継ぐため萩に入った関係で東光寺に葬られ、長府には墓碑がありません。

16. わが国での最後の築城



勝山城跡

勝山地区田倉の地に二つ古城跡があります。一つは中世山城遺構の勝山城跡であり、いま一つは近世城郭遺構の勝山御殿跡で、両者は混同されがちですが、明ら

かに別個のもので歴史的役割も大いに異なっています。即ち、勝山城は中世末の大内氏滅亡につながる戦跡地であり、勝山御殿は攘夷戦による遺構で、わが国最後の築城とも言えましょう。

さて、文久3年(1863)5月から6月にかけて下関の海峡で攘夷戦がくりひろげられた際、海に突き出した位置(現在の豊浦高校の敷地)にあった長府藩の居館は、海からの攻撃に対して極めて不利な状況となり、事実、6月5日の朝にフランス軍艦が撃ち込んだ弾丸が居館の屋根を越えて行くということもあって、奥向きの人々は勝山地区井田の来福寺に避難し、藩主らの本陣も山手の覚苑寺や功山寺へと移されました。

そして、かねてからの居館移転計画が進められ、四王司山・勝山・青山三山の嶮に深く抱かれ、前面に田倉の谷がひろがる要害堅固な地で、かつ藩領全体の中心部にも位置する場所が選ばれ、6月28日に新居館築営工事が起こされます。この工事には領民がこぞって協力し、“御加勢”としての奉仕は一日数百人にも達して大工事もわずか7カ月で完成、元治元年(1864)2月1日には、堂々の供ぞろえで藩主の入城となりました。

以後、長府藩はここを本拠として英米仏蘭四国連合艦隊との交戦、第二次征長戦としての四境戦を戦い抜き、維新の大業に大きい役割を果たしたのです。

維新後の明治2年(1869)には長府藩が豊浦藩と改められ、第十四代藩主元敏が豊浦藩知事となり、勝山御殿がそのまま役所になっていましたが、翌3年10月には公衙(役所)と藩知事の居宅を区別せよとの公命があり、元敏は長府侍町の桂家を借りて移住。さらに明治4年(1871)の7月14日には廃藩置県で一切の政務は山口県庁に移譲され、勝山御殿の城地と宏大な館舎は毛利氏の

私財として処分されて行くのです。了圓寺の門や覚苑寺の方丈(庫裏)がその御殿から移されたものと言われています。

ともかくその居館跡は、縦2.4m、横2.8mもの巨岩も用いられた石垣を残したまま長期間放置されていましたが、今は市所有の土地として発掘調査も行い整備もされ、今後の有効活用が待たれます。



ミツガシワ

なお、城跡の山側にわき出る清水の中に自生している寒冷植物のミツガシワ(南限説もある)保存といった課題も忘れてはならないでしょう。

17. 移転保存の武家屋敷

旅なれた文化人を迎えて、ひとしく感銘を語られるのが、長府毛利五万石の城下町長府に残された武家屋敷が連なる閑静なたたずまいです。古江小路や切り通しなどを中心とした一画などを散策するとき、語りかけてくるのは詩情に満ちた年輪の言葉です。

しかし、町の再開発という近代都市発展の上での必然的課題は、この長府とて無縁ではなく、土塀はブロック塀へと変わり、広い旧士族の屋敷は細分化されて今日的な住宅が軒を並べることとなります。



侍屋敷長屋

そうした中で、移転保存されているのが、壇具川に沿って侍町に面した一角の長府藩侍屋敷長屋(市文化財)です。この場所は、本来辻番所、さらに郡役所が置か

れていた重要な地点で、現在この地に移されている屋敷は、壇具川から日頼寺に至る侍町東側(海側)屋並のちょうど真ん中あたりにあり、約200年前の城下見取図によれば馬廻役二百石の西伝右衛門の屋敷の一部門長屋となっています。そして、この西家の左隣りが1,000石の桂家、右隣りが同じ馬廻役100石の飯田家、さらに左向かいには次席家老の三吉家と、かなり格式高い、壇具川を堀として堀の内的な役割をもった一角であったと思われます。

そして幕末動乱の前夜、文久2年(1862)にこの屋敷に生まれた西源四郎は、伊藤博文の三女を妻とし、外交畑に活躍、ルーマニア公使など欧州各国に在勤、退官後